

令和二年4月吉日初版作成

神（創造原理）と人間

高嶋善三郎

目 次

- 生命とは神そのものの光・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
- 鉱物などの物質にも生命がある・・・・・・・・・・・・・・4
- 生命を生かす生かすのせむ・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
- 神（生命の原理）と人間の関係・・・・・・・・・・・・・・6

お 願 い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構ですので、お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせ致します。

(スマホオ) 09033466619

(アドレス) zensan@peach.ocn.ne.jp

生命とは神そのものの光

生命(いのち、せいめい)という語を辞書で調べてみると、次のように記載されています。

①生物を無生物ではなく生物として存在させる本源。生命を物質の一形態として発生的にとらえる機械的考え方とこれを実体としてみる生氣論的考え方とが伝統的に対立する。

②ある分野で活動していく上での原動力。活動の根源となるものまたその活動期間。

③物事の存在を支える一番大切なもの。

これらの説明に対し、五井先生の解説されている生命は次の通り。

①生命は神そのものの光であって、不死なる光なのである。

②その働きは光の波動として霊そのものであり、想念とは魂魄より生ずる波動である。

③生命と呼ばれる光は、精神要素と物質要素との両面をもっており、宗教的にいえば靈魂魄といわれ、思考力をもった肉体人間のような現われ

方もする。

④生命は、宇宙神であり、宇宙心である大生命から分かれた小生命として縦に流れ、横にも人類として流れている。

⑤私たちの生命は、もともとは宇宙核や宇宙子という大生命の根源の光明波動であり、肉眼では不可視なる光明波動である。

五井先生の解説は、生命の深遠さを感じさせ、私たちの心をわくわくさせ、喜びで心を一杯にしてくれます。

「生命は神そのものの光であって、霊そのものであり、想念とは魂魄より生ずる波動であるという事である。」(1960年8月21ページ)

「生命というものは、大生命が小生命分生命と縦に流れ、横にも人類として流れている。」(1967年5月11ページ)

「大生命は即ち宇宙神であり、宇宙心である。」(1962年11月10ページ)

「生命とは不死なる光なのであり、その働きは光の波動としてあるのである。光というと、物質的な光と、精神要素そのものの光とがある。

そして生命と呼ばれる光は、精神要素と物質要素との両面をもっており、宗教的にいえば靈魂魄といわれ、思考力をもった肉体人間のような現われ方もするのである。」(1962年11月4ページ)

「宇宙核や宇宙子というのは、大生命の根源の光明波動であり、私たちの生命として働きつづけているのである。

生命というのは、肉眼では不可視なる光明波動なのだという事を、その中に入れておいて下さい。

宇宙子の集合の、光明そのものの生命の時には、光の精神そのものであったのである。」(1962年11月8ページ)

鉱物などの物質にも生命がある

生命というのは、人間とか動物とか植物とかにあるだけではなくて、鉱物にも石にも鉄にも土にも生命がある。ありとあらゆる、現われているものには、すべて生命が動いているわけである。ですから生命の無い所というのは無いのである。即ち生命というのは、宇宙万物隅なく行き渡って生きているものである。

私たちの見ている物質というものは、ただ単なる固体の物質に見えるが、実はそうではない。いかなる物質も生命波動の現われでないものはないのである。

ただ、そこには精神要素が多いか少ないかの、相違があるだけなので

ある。

とはいうものの、動物は神に隷属されたもの、人間は神そのもの分霊であること、本来自由自在なるものであることを、よくよく考えて感謝しなければならぬ。『神と人間』250ページと言われています。

「人間や動物に生命のあることは知っているが、鉱物や植物に生命のあることを忘れている人もある。

生命というのは、宇宙万物隅なく行き渡って生きているものである。

私たちの見ている物質というものは、ただ単なる固体の物質に見えるが、実はそうではなく、いかなる物質も生命波動の現われでないものはない。

ただ、そこには精神要素が多いか少ないかの、相違があるだけなのである。」(1962年11月のページ)

「生命というのは、人間とか動物とか植物とかにあるだけではなくて、鉱物にも石にも鉄にも土にも生命がある。ありとあらゆる、現われているものには、すべて生命が動いているわけである。ですから生命の無い所というのは無いのである。

生命が生き生きと生きていることは、全部大神さまの中なのである。だから生きているものの中で、宇宙神の外にあるものはない。すべて神のみ心の中にあるわけである。」(1964年5月16ページ)

生命を生かす生かす

生命というものは、神のみ心そのままに働いている時が、一番生き生きと動いている時なのである。

体の諸器官については、諸機能がさわりなく順調に働いている状態であるし、精神的については、心に何の把われもなく、すっきりと晴々と動いている状態である。

神様は光である。光というのは生命が働いている姿なのである。生命を働かせることはどういう事かというところ、一番懸命やることなのである。何でもいから、一番懸命やればいい。

人間の中で癒し者が一番いけない。何故いけないかというところ、生命を活すからいとおもうと言われています。

私たちが生命を輝かせ生きていく上で、参考になるのが、赤ん坊の姿です。赤ん坊はいるだけで私たちの心を輝かせてくれています。

五井先生にみるに、赤ん坊の時は神界の生命がそのまま現われている。業は守護霊守護神が預っていて出さないから、私たちはその生命（神）

の光に打たれ、それで愛情が湧いて来ていると言われています。

私たちは、大人になってくると生命の光が余計出るにつれて、生命の光は強くなるが、一方過去の因縁がだんだんと出てきている。だから年と共に、年をとって来たならば、生命の輝きの動きをじゃましている業を浄めなければいけない。

大人になっても生命の輝いている人は、素直な明るい人である。そういう人の姿というのは、肉体だけではなく、神様のみ心が、み光がこの肉体を通して出て来る姿なのであると、説明されています。

生命の輝きの動きをじゃましている業（誤る想念）をいかにスムーズに浄めていくかが、私たちの大きな課題なのです。

「生命というものは、神のみ心そのままに働いている時が、一番生き生きと動いている時なのである。

生きて生命を生かす生かすというところは、一体どういう状態をいうのであるか。

肉体の諸器官については、諸機能がさわりなく順調に働いている状態であるし、精神的については、心に何の把われもなすっきりと晴々と動いている状態である。「」1994年2月9ページ

「神様は光である。光というのは生命が働いている姿なのである。生命

を働かせるとはどういう事かという事、一生涯懸命やることなのである。何でもいいから、一生涯懸命やればいい。」(1961年9月28ページ)
「生命を生かす、ということは一生涯懸命ということである。何でもかんでも、一生涯懸命やる方がいいのである。

人間の中で怠け者が一番いけない。何故いけないかというと、生命を汚すからである。」(1975年11月20ページ)

「なぜ赤ん坊がきれいに見えるかというと、本心の光が少ししか出ていないが、その代わり業も少ししか出ていないのである。だんだん成長すると、光がだんだん余計に入ってくる。余計に入ってくる同時に、業も消えてゆく姿として、余計出て来る。二十才くらいになると、ズブッと多くなって来るわけである。両立するわけである。

そこに、業を付け加えたり、減らしたりしながら、だんだん年をとって八十になる。」(1968年7月34ページ)

「赤ん坊がニコニコする。見ている人が、ああいいなあと思う。その時心に愛が芽生える。喜びが出る。喜びが出た時、光が出ているのである。愛らしいなあという愛情が出る。それは光である。

赤ん坊が一人いることが、幾人もの人を輝かすことになるのである。なぜ赤ん坊が皆を喜ばせて、輝かせているのかというと、生命がむき

出しに現われているから、その生命の光に打たれるのである。神様の光に打たれるわけである。それで愛情が湧いて来るわけである。

大人になってくると曇らせてしまいが、どういう姿が生命の輝いている姿かというと、それは素直な明るい姿である。そういう人の姿というのは、肉体だけではないのである。神様のみ心が、み光がこの肉体を通して出て来る姿なのである。それに触れるわけなのである。つまりその人の「汝自身」に触れるわけである。」(1970年2月25ページ)

「赤児の生命は純粹である。生命そのままに生きている。赤ちゃんの時は神界の生命がそのまま現われていて、業は守護霊守護神が預っていて出さないのである。生命の光が余計出るにつれて、だんだんと過去世の因縁が出てくるわけなのである。年と共に、生命の光は強くなる。年をとって来たならば、生命の輝き、働きをじゃましている業を浄めなければいけない。」(1976年9月21ページ)

神(生命の原理)と人間の関係

以上五井先生が言われている生命について、『白光誌から』の中に記載されている五井先生のお言葉をみてきました。

五井先生の解説は、この肉体界で言われている概念といかに違つか分かります。無知による恐怖から解放され、この生命を輝かせて生きていくには、真理を知ることがいかに大切かが分かります。

では、生命をどのように見ていけばよいのでしょうか。神（生命原理）と人間との関係については、『神と人間』に詳しく解説されています。

その中から特に注目すべき箇所をみてみましょう。

●人間とは肉体だけではないのである。神、すなわち宇宙に遍満せる生命が、その創造せんとする力が、個々の人格に分けられたもので、しかも横において繋ぎ合い、協力し合って、その与えられた力を、縦横に、自由無碍に發揮し、形ある世界に完全なる神の姿を画き出そうとしている者である。神とは宇宙に遍満する生命の原理であり、創造原理であり、人間とは神の生命を形ある世界に活動せしめんとする神の子なのである。

(16ページ)

●人間は本来、神からきた光である。光は即ち心である。神は、すべてのすべてであり、無限の智慧、無限の愛、無限の生命であるけれども、神そのものが神そのままの姿で動いたとしたら、形の世界にはなにもかも現れてこない。無限がそのまま動いたとしても、無限はいつまでも無

限であって、有限にはならない。一つがいくつ動いてもやはり一つなのである。無限がいくつかの有限になり、一が自己分裂して二つになり、四にならなければ、形の世界は創造されない。この光そのものである神がある時、突然その統一していた光を各種、各様相に異なった光として放射した。この時から神の創造活動は始められたのである。神はまず天地に分かれ、そして、その一部の光は、海霊、山霊、木霊と呼ばれる自然界を創造し、活動せしめ、その一部は動物界を創造し、後の一部の光は直霊とよばれて人間界を創造した。ここにおいて神は、一であり、多であることとなり、一即多神となるのである。(19ページ)

●人間の尊いのは肉体の知識が優れているからでもない。肉体の知識が多いのはよいが、あくまでそれも人間の本性、靈的智慧、いわゆる神智をもとにしていなければ、却って人類を不幸に陥れる。唯物論者の行動が非常に理論的に巧緻でありながら、それを行動に移すと、社会を不穩にし、世界情勢を不安動揺せしめてゆへのは、神智にゆらないからである。即ち人間は一体いかなるものかを知らないからゆへである。(14ページ)

●霊・魂・魄として三界に活動している分霊はしだいに肉体人そのものになってきて、肉体外の六官（直感（直覚）神智）の衰えを見せ、すべてを五官の感覚にのみ頼ることが習慣づけられ、五官に触れぬものは無

いものと思うようになり、人間とは肉体であり、心（精神）とは、肉体の器官が生み出した働きであるとして、分霊の活動は分霊そのものとしては感じられぬようになっていった。（筆者注：光の存在としての自分は、魂魄の中に閉じ込められ、想念世界にしか意識できなくなった）しかし、分霊と分霊とが本来は神において一つのものであったことが幽体に記録され、記録されているのが意識を超えて思われ、肉体においては、はつきり個々に分かれていながらも、お互いが、お互いのことを思い合う感情、愛は消えることはなかった。この愛の狭い範囲の働きは、親子、夫婦、兄弟の間に、ひろくは、人類、社会の範囲に及ぼされている。愛こそ神へのつながる道であり、光であり、本来の自己を見出すただ一つの感情、行為であった。

分霊は物質の世界、形の世界において、己の自身の本来身、光（神）を忘れかけながらも、心の底から湧き上がってくる、人間本来一つの光の理念が、愛の思いやりとなり行為となり、わすかにその光の理念が、愛の思いとなり行為となり、わすかにその光を架っているのである。神の心を愛と呼び、業因の働きを執着と呼び、この二つの心が、人間の生活を、幸と不幸に分けてつくりだすのである。（ペンペーシ）

現在地球と世界人類は二万六〇〇〇年に一度起こる、次元上昇（アセンション）の時代を迎えています。私たちの魂は分離と統合を二万三〇〇〇年ごとに交互に繰り返しながら、進化してきており、今回は統合に向かっていきます。高次元の世界に移行しようとしているのです。この地球人類は、神と人間の関係を正しく理解できなかったため、過去幾度もアセンションに失敗し、絶滅したと言われています。今回地球と世界人類のアセンションを成功させるために、既にアセンションに成功を果たした星々から優れた宇宙人（神）が応援に来られ、そして肉体界にお釈迦様やイエスキリストや五井先生など聖者が直に降りてこられ、真理を説かれ、私たち人類を導いてこられ、準備がなされてきたのです。

そして昌美先生のご指導により、各種ご神事を遂行することにより、2014年1月の新年祝賀祭において、「宇宙神の根源に汝らの魂は直結した」というご神示があり、これにより神聖復活の印を組めば、誰でも天と地を結び光の柱を形成できることになったのです。神と人間との関係を正しく識（し）ることににより、この現象世界（相反する物質と心の二元対立の世界）のいかなる変動の中にあっても、動揺せず、天と地を結び光の柱を形成することの有り難さをあらためて確認でき、光としての自分を確信ができるようになります。